上演１０ ２０２５年7月２７日（日）５校目 中国ブロック（島根） 島根県立松江工業高等学校 「お手紙かみかみ」	第４９回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第７１回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会　担当委員 秋田県立横手高等学校 石河　かずは

上演開始のベルが鳴り、学校名と作品名がアナウンスされる。しかし、一向に客席の照明は落ちない。この瞬間から、「お手紙かみかみ」は開演していた。まず、一人の人物が幕の外でこちらに向けて雑談をし、その結びに童謡「やぎさんゆうびん」を観客に歌うよう促した。私たちが歌い終えると同時に幕が開き、登場人物たちは童謡の中でエンドレスに続く白山羊と黒山羊の物語を終わらせようと議論を開始する。

討論では、この議論や議題に関する意見が多く交わされた。この童謡に関する劇中の議論は、普段は気にもとめないような些細なことである。その上、登場人物たちがいくら議論を重ねても、その問題が解決することはない。これに対して講評委員からは、問題の規模に関わらず、必ずしも結論を導かなければならないものばかりではないという意見や「やめにしないか」というセリフから、戦争や政治といった現実の大きな課題との共通性を感じる、という意見が挙げられた。劇中の議論に複数回登場する「始めた者が終わらせるべきだ」という言葉についても講評委員で議論してみたところ、幼い頃にあった「最初に出した人が片付ける」などといった習慣や、始まりそのものに原因はなくとも続く過程で屈折した結果に繋がってしまう可能性について言及があり、言葉ひとつから視点の異なる複数の意見が挙げられた。そして物語は、この童謡を終わらせるための明確な答えが出せないまま佳境を迎えていく。だんだんと話題が「終わり」そのものについての話に移行していく。「いつかは終わりが来る」「終わりたくない」という登場人物たちの声に自身の高校生活や今回の講評活動を重ね合わせて共感し、切なく感じる委員が多くいた。

ラストシーンで演者たちは、おもむろに立ち上がる。どこか晴れやかな様子で「やぎさんゆうびん」を歌いながら登場人物たちが延々と踊り続ける中で、幕が下りた。その演出に、作中で語られた「有限」の中にも「無限」があることを感じさせられた。

途中で完全に暗転して混沌とした感覚を煽られる声のみの演出や、観客の介入によって演劇を成立させる手法に、未体験な演劇の面白さを教えられた。要所要所に挟まる軽妙なテンポ感の笑いどころや役者陣のこの劇を楽しんでいることが伝わるような舞台上での様子も、この作品を最大限楽しむことができた要因であると感じられる。

「お手紙かみかみ」は、無意味な話題に大きな意義を投げかけるような、観劇後の我々に不思議な余韻を残す作品であった。